なっているようだが，義務教育での理科で，竹内丑雄氏が指摘しているように，内容が現代科学と矛盾していたり，地学教師不足による教育の欠陥，気象のように，長期間の観測が必要でもモデル的理解ですましてしまい，ローカル的なものの知識ゼロ等が大きく言えば遭難の一要素となっているように思われる．つめ込み主義による教育の害ともいえる．教育で器械観測も必要であり，原理，理論の解釈もよろしいが，観天望気の機会を多くして天気について常に関心をもつようにしいた．

それを達成するには全国の理科教師が観天望気して気象の地区の特性をつかむように提案したい．

【新刊紹介】

籾山政子著：疾病と地域・季節

（大明堂 1971 年，228 p. 1,300 円）

わが国で数少ない生気候学者・医学地理学者である著者の，これまでの成果を体系ずけた貴重な書物である．3 部からなり，第 1 部は方法論，第 2 部は医学（疾病）地理学の体系的な記述，第 3 部は疾病の季節変動に関する最近の研究成果のとりまとめである．

まず，第 1 部の方法論の部では，医学地理学・生態学・公衆衛生学・社会医学それぞれの立場からの研究方法を述べている．ただ，ここで気になるのは，これらの学問の方法が並列して述べられている点である．著者の研究対象が，これらのいずれの学問においても研究対象になっており，それぞれ特有の方法をもっていることはよくわかるが，著者の方法がかならずしも明確でない．「単一の研究方法で簡単に割切れない」（p. 10）ではあろうが，例えば，「脚気症状をおこすに至った食生活の内容や，生活・労働の内容などのいわば病理的因子を規定する社会経済的諸条件・自然条件をそれぞれの地域社会にそくして具体的に分析する」（p. 11）ことは，どの程度の地域スケールをとるかによって可能とも不可能ともなろう．例えば，地域を国・県などを一地域単位として扱えば，その条件の詳しい分析はもはやほとんど不可能ではなかろうか．

こういう点から言って，「条件の分析」よりも，第 2 部の疾病の地域的特性についての「事実の記述」が本書においては，より光っている．学問自体が事実の記述の段階にあるためであって，本書の価値もまた，この部分にあると思う．特に第 2 部第 2 章の「地域にみられる疾病分布の諸特性」でマラリア・脚気・胃癌・脳卒中などに関する記述の部分は，医学地理学の教科書としての意義は高い．この次には，このような記述を中心にして，著者の方法による条件分析を加えた成書を期待したいと思う．社会階層による結核死亡率や乳児死亡率などの問題が扱われているが，他の疾病についても，ぜひ知りたいと思う．第 3 部は「疾病と季節」と題し，いわゆる生気候学的な立場からの著者の研究の集大成の部分である．それだけに迫力がある．著者のあみだした「季節病カレンダー」はひとつの表現法であるし，また，時代が進展するにつれて季節変動型が変化するなどは興味深い．国や都市によって，その型が異なることは重要な指摘であろう．今後は，国別ではなく，社会条件・自然条件などとのより詳細な対応が分析できるような地域スケールで，このような研究が進むことを望みたい．そうすれば，例えば生気象予報などという気象業務にも，こういう研究成果が役立ってゆくであろう．

このように，将来に対するひとつのステップを与えた点で，非常に重要であり，かつ興味ある書物である．生気象学・生気候学などは，ともすれば，単なる知識・教養の対象としてのみ考えられがちなわが国の気象界にあって，本書が多くの気象研究者・技術者に読まれ，毎日の業務にも役立つようになることを期待するものである．

（吉野　正敏）